

6 昭和56年産種籾の予措

(農試技術部)

気象不良年産の種籾でも採種をていねいに行い、うるちは比重1.13・糯は1.08の選種を行うと平常年の種籾と同等に使用できる。

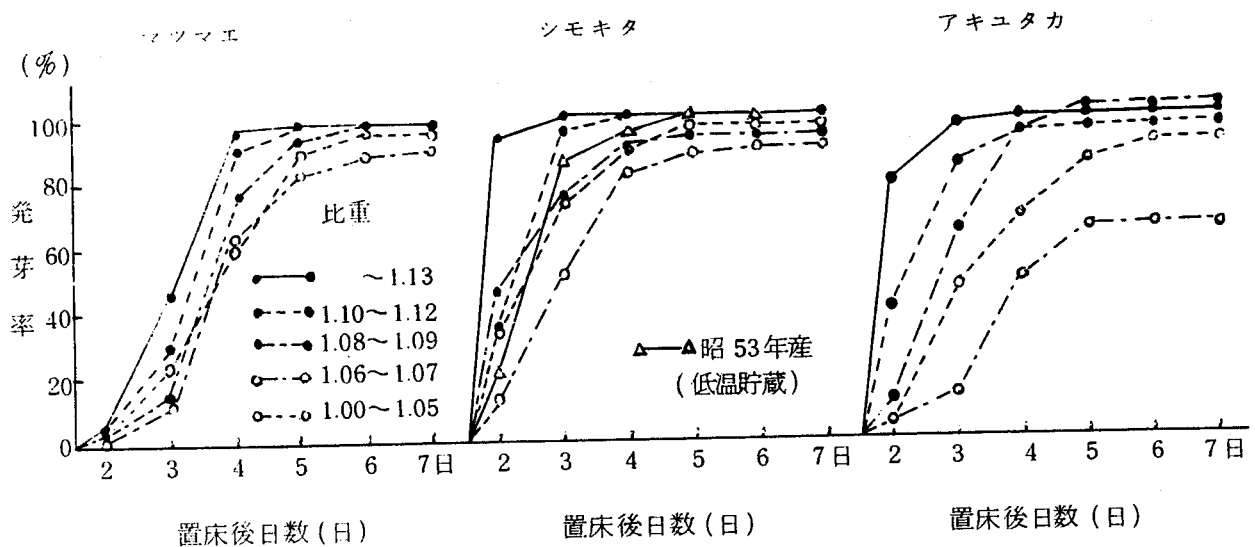
(1) 育景とねらい

56年の出穂遅延、台風15号の障害発生などにより、57年に供用する種籾の諸特性はきわめて不明な点が多く既往の試験成績もみあたらないので、とくに発芽率に重点をおいた使用基準を明らかにした。

(2) 技術内容

1) 56年産種籾の特徴と注意点

56年産種籾は出穂の遅れと近年に例をみない出穂期当時の台風害、登熟期の低温によって登熟不良籾や褐変籾、不稔籾の発生がみられた。これらの登熟不良籾や褐変籾を種籾にした場合、発芽不良や生育の不揃いなどの障害が考えられるので塩水選を基準どおり行うようにする。昭和56年産の種籾でも選種をていねいに行い、梗は比重1.13、糯は比重1.08の選種を行うことによって普通年に生産された種もみと同様に使用できることが農業試験場の調査結果で明らかにされた。(図1~7)



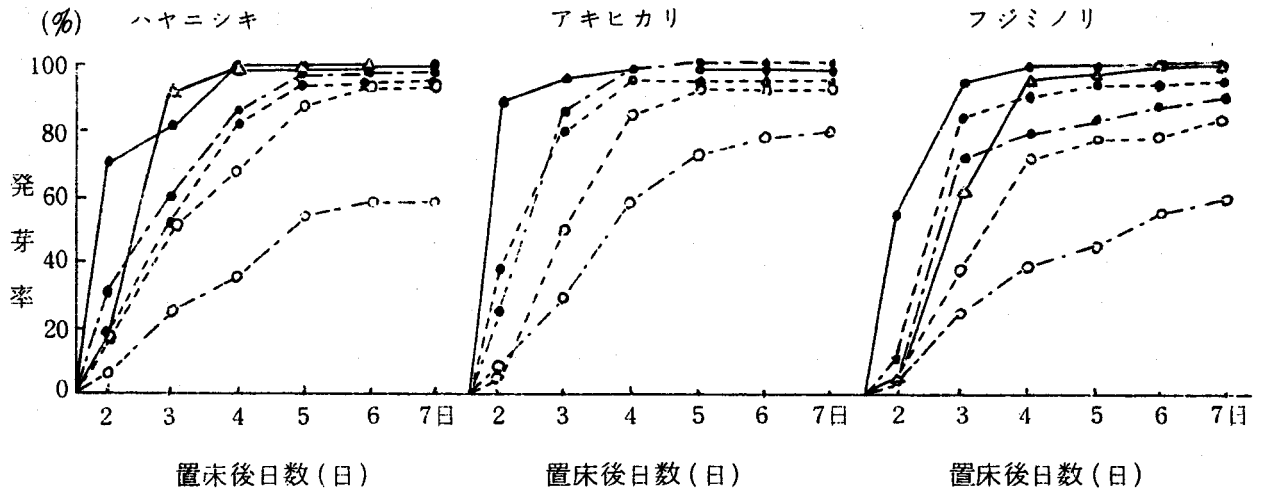


図1 発芽率調査

(発芽温度 30°C)

なお、次のことがらについては、充分、留意すること。

- (ア) 無加温育苗の場合、発芽日数が長びく傾向があるので、できるだけ加温出芽を励行し出芽を揃えること。
- (イ) 登熟程度によるが、種子量を普通年の所要量より余分に見込んで確保すること。
- (ウ) 種子消毒は防除基準によって確実に実施すること。

品種別、比重区分別に苗の形質について調査を行った結果、56年産種籾が比重区分別に差異がみとめられるものの比重1.13では前年産種籾に比べておとらないことがわかった。

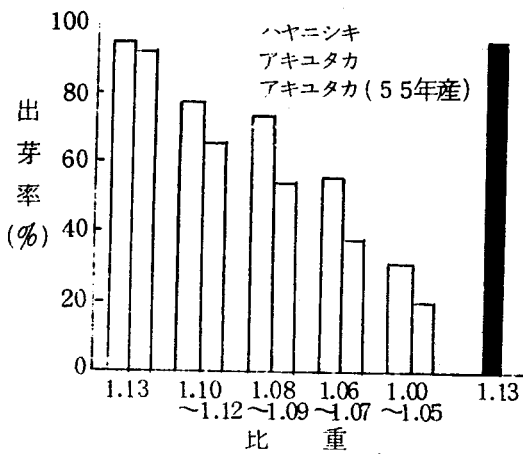


図2 出芽率(%)

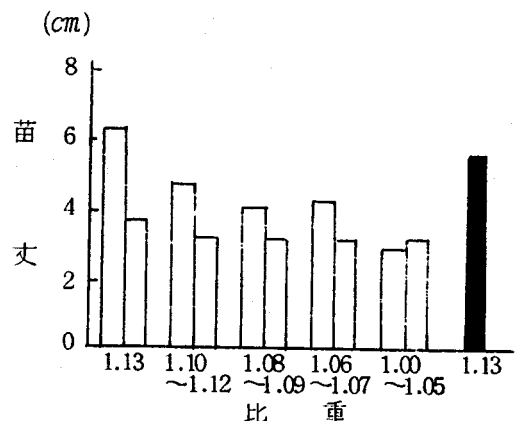


図3 苗丈(cm)

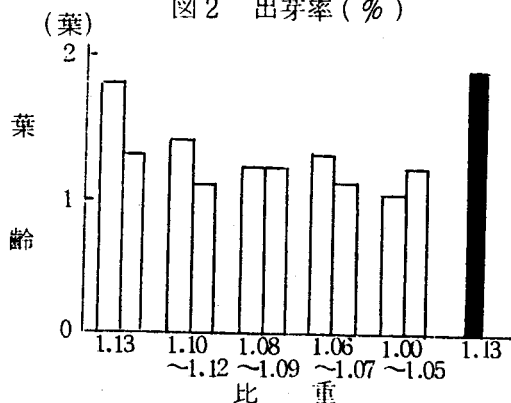


図4 葉齢(葉)

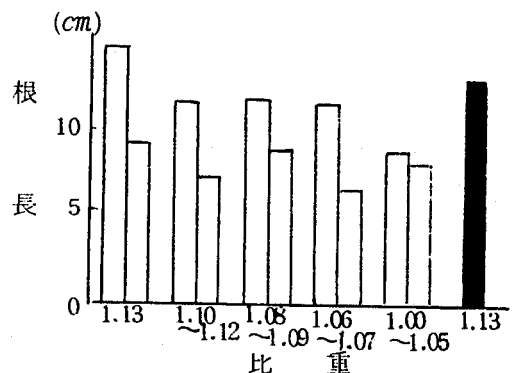


図5 根長(cm)

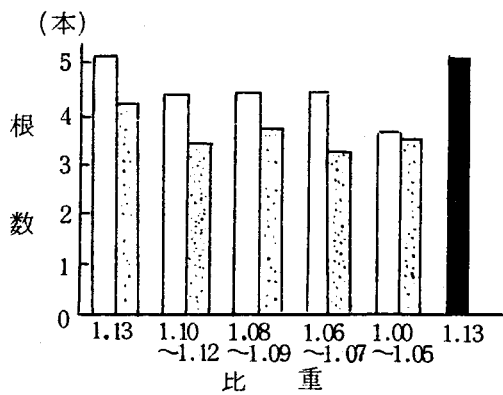


図6 根数(本)

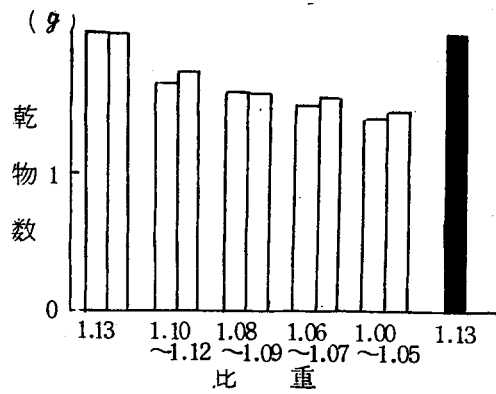


図7 乾物重(g/100本)

図2~7 品種別, 比重区分別, 苗形質調査

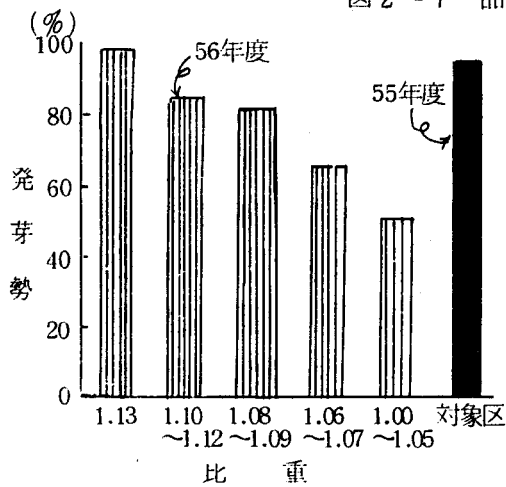


図-8 褐変粒の比重別, 発芽勢

(注) ・発芽温度 30°C

・褐変粒は, 粒の表面積の50%以上褐変したものを供試した。

・発芽勢は, 置床後4日に調査した。

また, もみ比重が軽いものほど, 褐変粒の発生割合が高まり発芽勢がとまった。しかし比重1.13の比重選を行うことにより十分種もみとして利用できることがわかった。(図8)

(エ) 着色粒に対する種子消毒効果

昭和56年産米は55年産米と同様に粒の褐変と玄米の着色の多かったのが特徴である。その原因は出穂後の低温多湿の気象条件に由来し, 登熟遅延による感染期間の長びきと, 病原菌増殖に好適した環境が持続されたことの2点あげられる。これら着色米から分離される菌類は多数にのぼるが, その主体はEpicoccum属菌によるものである。本菌は幼苗の発育を阻害する病原力をもつが, 幸いにして通常の種子消毒法により完全に殺菌が可能となることである。このことから56年産米も防除基準により常法どおり種子消毒を実施する。

表1 着色米に対する種子消毒効果

昭55(県農試)

処 理 区	紅 変 米	背 黒 米	健 全 米
1. ベンレートT水和剤 20. 0.5%湿粉衣	0%	0%	0%
2. ベンレート水和剤 0.5%湿粉衣	0	0	0
3. ホーマイコート 2%湿粉類	0	0	0
4. 無 処 理	33.3	44.4	17.2

無処理区の分離菌はEpicoccum sp.